

「薬草園の一般公開」レポート



当日の正門



受付



東邦大学薬学部1年
村川 万里

「昔は親から子へと知識が受け継がれ、家庭の薬として使われていた薬草。漢方薬としては今でも多くの人々が利用しているが、昨今では癒し効果のためにも使用されていることをご存知だろうか。ストレスの解消には、今では音楽、ペット、入浴、旅行など、多くの方法が提案されている。しかし薬草なら自宅で栽培すれば高額な費用はかからず、草花の観賞にもなる。また効能を知った上で体内に摂取すれば健康の保持にも役立ち、様々なメリットを感じることができるはずだ。東邦大学はさる6月3日、薬草園の一般公開を行った。今回、イベントに参加し、当日の様態をレポートした。

例年6月に行われているこのイベントは、東邦大学生薬部が計画・実行している。習志野キャンパスには6000㎡の敷地を持つ薬草園があり、そこに植えられた約200種類の薬草を、学生や地域の人たちに紹介する試み。薬草観賞に加え、薬草の効能を身近に感じてもらおうとの趣旨からハーブの苗の販売、ハーブティー・ハーブクッキーの無料試飲・試食も行った。

東邦大学の薬草園は、昭和4年に始まる。当時、薬学教育には薬草園の設置が条件であったため、現在の大森キャンパスの近くにある川崎市下丸子に、最初の薬草園ができた。昭和20年4月、大森は空襲に遭い校舎の大部分を失ったため、薬学部は現在の習志野キャンパスに移転した。昭和24年の校舎完成と共に、新しい薬草園もつくられた。

生薬部にとって薬草園の一般公開は、最も力を入れている一大イベントだ。今年は梅雨の訪れを感じさせる肌寒い中であつたが、同時開催された漢方フォーラムの来場者と合わせて、500人ほどの学生、受験生、そして地元の人々が来園した。薬草園を10のブロックに分け、部員を予め均等に配置する。そして訪れた来場者に、各ブロックに植えられている薬草の説明を行うという流れである。

人々の前に立って特定の事柄を説明することは、将来薬剤師になって、患者に薬について説明するときに必要とされる能力。特に薬学6年制になり、6年次のカリキュラムで半年間の実習が行われるが、この中では薬を説明する練習も行い、卒業後に即戦力となれるような薬剤師を養成することが目的の一つとなっているため、今回のようなイベントを通じて、人前に立つことの難し

来訪者への説明は貴重な経験



当日の薬草園

さや練習の必要性を感じられたことは、貴重な経験となった。また薬剤師でなくても、社会人として自分の伝えたいことを、他人にどう説明するかも非常に重要と思っている。

当日の来場者は、その薬草について詳しいのは、目の前にいる学生だと思っているから、「この薬草の利用の仕方は?」「この薬草とあっちの薬草はどう違うの?」など、基本的なものから多少マニアックなものまで、多くの質問を投げかけた。部員たちは薬草の専門家ではないので、全ての質問に完璧に答えることは難しかったが、聞かれた質問に答えられるよう一生懸命に説明した。

部員の一人は「今は万が一誤った知識を伝

また他の部員は、「薬草の知識が増えることで、漢方に興味を持てるのはもちろん、薬草の知識は別の機会に人に教えられるし、自分にとっても有用なので、今後も薬草について研究したい」と述べた。来場者の中には部員よりも薬草に詳しい方もおり、知らない知識を慌てて自分の予習ノートにメモする部員の姿も見られた。

市川から訪れた人にインタビューしたところ、その方は普段本学の生協で働いておられ、友達と2人で来場したとのこと。「生薬部の人たちは、まだ知識は完璧ではないながらも、優しく親切に教えてくれた」と温かいコメントをいただいた。

また訪れた受験生も、薬草園を見る機会はめったにないため、興味深かったようだ。少子化や6年制に伴い減少した薬学部志望者は、オープンキャンパスや文化祭でキャンパスを回れるものの、薬学の実際に触れられるチャンスが少ない上、薬学生が皆で一つのことに



説明する生薬部生

えても、人を殺すようなことはないが、将来患者の前に立って、もし説明を間違えたら大変なことになる。至らない点に多く気付くことができたのも、今回のイベントのおかげだ」と話していたが、将来、この練習が必ず役に立つ時が来ると思う。

集中している姿は見られない。また薬科大学が所有している薬草園を見学できる機会は少なく、今回の薬草園一般公開により、薬学を身近に感じられたのではないだろうか。

当日は、薬草園から100mほど離れた場所にあるハーブ園に、ハーブティーやクッキーの試飲・試食コーナーが設けられ、多くの来場者が食べてくれた。料理したのは大学構内の寮に住んでいる生薬部の学生で、用意されたものは甜茶やハイビスカスティーなど、美容や健康で注目を浴びているものが多かったため、来場者も関心を持ってくれたようだ。また味の違いが分かりやすかったため、飲み比べて自宅でも作ってみたいと言う声も聞かれた。

来年は6年制の一期生が先輩となり、一般公開を計画・実行する中心になる。6年生になるまでに説明することの難しさを知り、患者の気持ちや知りたいことをきちんと聞き取り、答えられる能力が身に付くよう頑張りたい。

モチベーション高めめる機会に

「試飲・試食コーナー」も好評